

パルクールジムにおける「環境の用具化」
：パルクールにおけるスタイルと環境の考察に向けて

“Equipmentification of Situation” in Parkour Gym
： To Consider Style and Situation of Parkour

三谷 舜*

はじめに

「パルクール (parkour)」を動画共有サイトで検索すると、都市を縦横無尽に駆け回る映像が多数ヒットする。一見するとそれは、「無鉄砲」で「命知らず」な行動に思われるかもしれない。とはいえ近年では、専門の指導員資格が整備され、「安全」に練習を行うために練習場が作られるようになってきた¹⁾。

2001年にはパルクールの先駆的なグループである「YAMAKASI」を題材にした映画『YAMAKASI』がフランスと日本で上映された。2003年にはイギリスのチャンネル4がパルクールのドキュメンタリー番組『Jump London』を放送している。このように、パルクールは徐々にメディアへの露出を増やしていく。2017年には、人気ゲームの「アサシンクリード (Assassin's Creed)」を実写化した映画『アサシンクリード (Assassin's Creed)』のスタントシーンにおいてパルクールが採用されていることが話題となった²⁾。

1990年代に結成された「YAMAKASI」というグループは、強靱な肉体を作ることや技術の向上のみならず、精神的にも強い人間になるというパルクールのディシプリン (哲学) を彼ら自身で構築していた。YAMAKASIが構築し

*中京大学スポーツ科学部任期制講師

たパルクールのディシプリンのなかには、パルクールのテクニックの優劣を競争や競技会で判定することを否定する向きがある。

しかし、近年、パルクールは競技化への道を歩み始めている。競技化されたパルクールは、2017年から国際体操連盟（Fédération Internationale de Gymnastique）によって統括され、オリンピックへの採用を目指す動きが始まっている。日本では、2018年4月に日本体操協会（Japan Gymnastic Association）がパルクール委員会を設置して以降、表1のように定期的に大会を開催している。

表1 日本体操協会パルクール委員会が関係する国内のパルクール大会

2019年11月	第1回パルクール日本選手権
2021年1-2月	第1回JGAパルクール・オンライン・コンペティション
2021年3月	PARKOUR TOP OF JAPAN IN AWAJI 2021 presented by Xperia
2021年6-7月	第2回JGAパルクール・オンライン・コンペティション

しかし、競技化はパルクールの本来の形ではないと主張する動きもある。日本パルクール協会（Japan Parkour Association）は、「パルクールでは本質的に、他者と競う概念はありません。しかし、パルクールの人口増加とともに、パルクールの一部を切り取る形で、特定のルールの中で勝敗を決める新競技」としてパルクールの競技化を捉え、「スポーツパルクール」として分類している³⁾。それは、「パルクールの裾野を拡大していくために、パルクールの本来の性質を守りつつ、パルクールとは異なる視点で、新たにパルクールを楽しめるように設計された競技⁴⁾」であるとし、その中には、スピードラン、フリースタイル、スキル、タグの4種目がある⁵⁾。

日本パルクール協会は種目の分類を行なった上で、「同様の動きが陸上競技やスポーツクライミング、体操、ダンスなどの他競技でも見られ⁶⁾」ることは認めている。だが、「多くの動きはパルクール実践者達が長年の実践の

中でパルクールのために発見・開発した動きであり、1つ1つの動きは効率的な移動や安全な実践、新しい身体の使い方に焦点が当てられたパルクール独自の発想が加えられた独特の動き⁷⁾」であるとする。つまり、「パルクールは独立した歴史を持つ独立したスポーツ（運動方法）であり、決して他のスポーツの組み合わせや一種目⁸⁾」ではないことを主張している。そして、日本パルクール協会はパルクールが国際体操連盟に取り込まれ競技化していく経緯に対して、次のように表明している。

2017年、国際体操連盟（FIG）は突如としてパルクールの国際連盟となりワールドカップを開催すること、パルクールを体操の管轄種目とすること、また一度も公式な世界大会が開催されたことのないパルクールをオリンピック体操競技における1種別として提案することを各国のパルクール協会への事前の相談なく宣言しましたが、パルクールは独立したスポーツ（運動方法）ですので、体操競技とは一切関係がありません。この事案を受け、英国パルクール統括団体 Parkour UK を筆頭に各国パルクール協会、パルクール団体および国際パルクール組織「Parkour Earth」より、国際体操連盟の行動を「不正であり侵害である」とする抗議の公開書簡が数多く提出されました。パルクールと体操は、お互いに練習施設を共有しうるスポーツ同士ではありますが、日本パルクール協会は Parkour UK および国際パルクール組織「Parkour Earth」の考えに賛同し、「パルクールは体操ではない」「パルクールは独立したスポーツである」と考えています。⁹⁾

この表明は、パルクールが国際体操連盟の管轄下に入ること、¹⁰⁾「アーバンスポーツ（urban sports）」への「取り込み（co-option）」が生じることへの懸念であると言える。アーバンスポーツとは、「ライフスタイルスポーツ」のなかでも普段から都市部で実施されているスポーツであることと、都市部

でも会場設営の仕方によっては実演可能なスポーツ」である¹⁰⁾。それを提唱する国際オリンピック委員会 (International Olympic Committee) はアーバンスポーツに「若者をオリンピックとその理念であるオリンピックムーブメントに引きつける」という狙いを持たせている¹¹⁾。

つまり、パルクールはアーバンスポーツに取り込まれ競技化する過程で、「会場設営の仕方によっては実演可能」なものに変化させられているのである。これは、公園の敷地内や駐車場などのスペースといった本来激しい運動を想定していない空間への競技会場の設営という面と、体育館や商業施設内といった、屋内空間でもパルクールを実施可能なものにするという面の2つがある。

そこで本稿では、屋内空間でもパルクールが実施可能になる「屋内化」が進み、現在では「環境の用具化」が生じているという側面を明らかにしたい。まず、先行研究よりパルクールにおけるディシプリンを整理し、スタイルと環境の考察を行う。次に、日本におけるパルクールの室内化を取り上げる。具体的には、日本においてパルクールジムが設立されていることの背景やジムの形態を、筆者が行った観察調査の結果から整理する。最後に、スポーツ技術論の観点から競技志向のパルクールと非競技志向のパルクールを比較し、リスクのコントロールやトレーニングの形態として室内化が進行し、「環境の用具化」が生じているということを明らかにする。ひとまず、本稿が把握を試みる「環境の用具化」とは、パルクールの実践環境に必要な障害物を用具化することで、パルクールの実践環境を室内外問わずに設られるようになることとし、考察を進めたい。

1 パルクールのディシプリン：ストリートとスタイル

本章では、パルクールのスタイルが屋外・ストリートで演じられることの意味やそれに関連する議論について、先行研究であるベリンダ・ウィートン

(Belinda Wheaton) (2013 = 2019) とジェフリー・L・キダー (Jeffrey L. Kidder) (2017) による研究を参考にして、考察を試みる。

パルクールのパフォーマンスにおける一連の流れは「フロウ (flow)」と呼ばれる。パルクールの実践におけるフロウの意味合いは、「動作的な意味で、行雲流水 (風に漂う雲や流れる水のようにその流れに身を任せること) のように、常に川を流れる水のように絶えず変化しながらも動き続けること¹²⁾」であるが、「とにかく闇雲に動き続ければ良いもの¹³⁾」ではない。このことは、パルクールの語源をたどると見えてくる。

パルクール (parkour) はフランス語で「ルート」や「コース」を意味する *parcours* に由来する。パルクールのうち非競争的な身体訓練を、移動の芸術 (art du déplacement) や、動作の芸術 (art of motion) と称してきた。近年では、フリーランニング (freerunning) と称されることもある。こうした様々な状況の中でも共通しているのは、「パルクールは、障害物を乗り越えたり、くぐり抜けたり、回転して通り抜けていく「無駄のない動き」に注目した人間的な動作から影響を受け¹⁴⁾」た身体活動であるということであろう。パルクールで展開される「無駄のない動き」に注目した人間的な動作によるパフォーマンスは、一連のルールや方針を持たない。つまり、動きの習得や鍛錬に体系的なカリキュラムが準備されているわけではないのである。それは、「パルクールはダンス、格闘技、体操などとも重なる動作を伴いながら、スポーツ、芸術、鍛錬 (トレーニング) などとして様々に描かれる」ことに関連する¹⁵⁾。

このように、体系立てられた形を持たないパルクールのパフォーマンスは、ストリートで演じられてきた。たとえば、先に紹介した『Jump London』に見られるように、建物の屋上から次の建物の屋上へと飛び移っていくようなフロウや、市街地の階段、噴水の縁石、手すりなどを独特の動きでくぐったり飛び越えたりするような動きがそれに当たる。映画のみならず、動画共有サイトで「パルクール」と検索すると、多くの動画がヒットする。それぞ

れの動画の中で、トレーサー（実践者）が思い思いにフロウを完成させ、それを記録し、発信しているのである。

トレーサーたちが集まってトレーニングしたり、パフォーマンスを行ったりすることを「ジャム（jam）」という。ジャムの中での振る舞いを規定するルールはなく、喋っていても、筋力トレーニングをしても、技の映像を撮影しても良い。また、その中ではヒエラルキーも存在しない。

ただ、このような活動は、都市を通常のように使うこととはかけ離れていると言える。それにより、「市会議員や警官は（…）トレーサーを「社会のクズ」とみな」してきた歴史もある¹⁶⁾。その背景には、「たとえば警察をどのように撒くのかと言うように、パルクールがいかにか逸脱行動を促しているのかという見方に貢献してきたのか」といった考えを持たれていることや、未来の泥棒に壁や屋根を伝う技術を教えていると行政職員に偏見を持って接せられてきたことなどがある¹⁷⁾。

しかし、このようなことは特段珍しいことではない。たとえば、イギリスのイーストサセックス（East Sussex）において、公園内にパルクールのトレーニングエリアを設置する提言がなされた際に、「トレーニングエリアが若者に公園の周囲にたむろすることを促し」てしまうと言う意見があり、その結果「騒音を発生させること」を主な理由にして否決されたという事例もある¹⁸⁾。その一方で、パルクールのディシプリンにおいては、「トレーサーは彼らの環境やコミュニティを保護し、敬意を払いながら、建物を「新しくオルタナティブな方法」で使用」されており、破壊、改変などのダメージを与えないことが求められており、この点はトレーサーに共通して理解されている¹⁹⁾。

このように、パルクールは都市を「競技（演技）環境」として位置づけている。また、トレーサーたちのディシプリンにおいてその環境を保護することは何よりも優先して守らなければならない事項である。なぜなら、警察や行政といった公的な権力による締め出しに遭うと、パルクールを行える「ス

ポット」が一つ消えてしまうことに直結するからである。

トレイサーが異質な都市の使い方をすることで生まれる疑念は、このようにわゆる「迷惑」のみではなく「リスク」も同時に孕んでいる。パルクールにおけるリスクは、トレイサー自身に及ぶリスクと、トレイサーが周りに及ぼすリスクの2つがある。ここでのリスクとは、「潜在的な危険性の評価とそれらの問題を軽減しようとする試みにかかわる危険性についての特定の視点²⁰⁾」である。つまり、動き出す前に危険がどこにあるかを考えたり見極めたりすることと、それを回避したり軽減するためにどのように動けばいいかを計画しておくことと言える。

トレイサー自身に及ぶリスクについては、たとえば今いるビルから隣のビルへ20m級のジャンプを決めることや、陸地から海に停泊している船へ飛び移ることは、パルクールというよりは「スタント」である実践者たちは理解している。ベリнда・ウィートンは、「メディアでの描写とは対照的に、パルクールの実践者、あるいは指導者は「安全であること」の重要性を認識しているため、エクストリームやハイリスクというレッテル貼りを拒否²¹⁾」していると指摘する。ではトレイサーは「安全」をどのように担保しているのだろうか。

パルクールでは、初心者ほど怪我をするリスクが高い。それは「初心者は「決して適切なトレーニング方法を学ばない」」ことに起因する。つまり、自らの技術レベルが実践する技に必要なスキルに到達していなかった時に、怪我につながる事故が発生するのである。熟練したトレイサーでもミスにより怪我につながる事故が起きる可能性はもちろんあるが、正しくパフォーマンスを発揮できなかった際、どのようにしたら最小限のミスにとどめ、リスクを回避できるかをイメージしてからパフォーマンスに入る。このリスク回避のことを「リカバリー」と彼らは言う。トレイサーたちは、フロウの完成を目指してパフォーマンスに入る前に、自分が通過するコース、通過する際の技、それが失敗した時のリカバリーと、さまざまなことをイメージしてから

スタートする。このようなことについて、キダーは「トレーサーが、壁や階段しか見えないところに冒険のチャンスを見出すのは、事実であるものの、彼らが不確実性に病的に惹かれていると考えるのは間違っている²²⁾」おり、「パルクールには責任あるトレーニングというレトリックが染みついている、コントロール不能な行動をとったり、危険について大胆な発言をしたりすると、すぐに注意²³⁾」されると述べている。

負傷率については、学術的な研究でも触れられており、まじめにパルクールに取り組む者は「マットやパッド、フォームピットが備わった体育館などの、整備された環境で離れ業を実践する、非常に優れたアスリート²⁴⁾」と指摘されている。また、「特筆すべきは、トレーニングにおいてジムがより一般的になるにつれて、これらの施設が象徴的な安全性の儀式に組み込まれ²⁵⁾」るようになったと指摘し、「トレーサーたちは、屋外でのリスクテイクを正当化するために屋内トレーニングを行う²⁶⁾」という側面も見られる。

トレーサーが周りに及ぼす危険については、構造物の破損や通常の使い方をしていない一般人との接触などが考えられる。こういった「事故」の類は、先ほど触れたように初心者に近づくほどにリスクが増加する。破損する可能性があるかどうかは着地場所、手をつく位置などの強度を事前に確かめることで回避する。一般人との接触の可能性は、仲間に死角となる位置を見ておいてもらって、安全を確保する。

ここまで整理してきたような背景から、パルクールは屋外で行うものであるものの、活動が制限されてしまうことも多々ある。そこで、近年ではパルクールが室内化してきているという状況の一端を、筆者が行った調査をもとに示したい。

2 日本におけるパルクールの室内化

ここまで、ウィートンとキダーの議論を参考にして、パルクールのスタイルの特徴として屋外を前提していること、また、リスクとの付き合い方や考え方を整理してきた。そこでは、リスクを回避するためにトレーニングを積むことや、屋内でのトレーニングは警察や行政から「締め出し」に遭わずに済むといった点から、屋内のトレーニングが実施されていたことを確認した。

そこで本章では、A県B市のパルクールジムおよびY県Z市のパルクールジムにて筆者が行った観察調査から、日本におけるパルクールの室内化の現状を記述する。ここで記述するパルクールの室内化の現状は、本稿で捉えたい「環境の用具化」の考察に向けた土台となる。それに加えて、パルクールの実践環境を屋内に作ることで、その中でどのような文化が形成されているのかということ把握することにつながる。つまり、「環境の用具化」により形成される文化がどのようなものなのかということをも事例から明らかにすることにつながる。

2.1 A県B市のパルクールジム

このジムは、ショッピングセンターの2階に入居している。調査当時は3名の講師が交代でワークショップやフリータイムの管理を行う体制で運営されていた。運営会社社長でイギリスへのパルクール留学経験もあるA氏、店長でアジア大会出場経験のあるB氏、従業員で全国大会出場経験のあるC氏の3名である。このジムには小学生の会員が多く、保護者が送迎してきてジムで活動させるという形が多かった。保護者も料金を支払い、施設を利用する姿も見られた。小学校5年生の女子児童は、「パルクールをしているのは学校で一人。他の子はピアノとかか……ここにいるのは兄弟とか以外はみんな違う学校の子がほとんど。」と話していた。

14 時ごろから小学生 6 名ほどがフリー利用を始める。A 氏も自分でやったり、教えたりしていた。動いていく中で、保護者たちも混じって「ジャム」が形成されていく。途中、フロウがうまく完成せず、「(足が) 届かない」、「(身体が) 回らない」といった声が出てくる。すると、A 氏は着地点の前後にマットを敷いたり、着地目標のレールに高さを合わせた台を用いたりして恐怖感を無くそうとしていた。

フロウが上手くできるようになると、利用者が自発的に器具のレイアウトを変えながら、ジャンプ、回転などの構成を変化させていた。同時に、マットを敷いて回転技の練習をする利用者もいた。うまくできない動作は、「ハードルを飛ばみたいに」とか「片足スクワットの動作で」とかアナロゴン²⁷⁾を用いて A 氏が指導していた。14:50 ごろにジャムが終わり、片付けをみんなでする。先で話を聞いた女子児童に、レイアウトを変えるときに何を考えているかを聞いたところ、「ギリギリいけなさそうなところに置く、できないことができるようになりたい」と言っていた。

ジム内に揃えてある用具や内装について A 氏は、パルクールジムのような環境を作る専門メーカーはなく、全て自分で試行錯誤しながら作成したとのことだった。箱や鉄管の組み方などの工夫点としては、^{すじかい}筋交を増やしたり、梁の数を増やしたりして、「トレースする際のモーメント」に耐えうる物を作っているとのことだった。ここから、2019 年 11 月に開かれた第 1 回パルクール日本選手権大会²⁸⁾の話になった。この大会における用具は、パルクールのことを理解して用具を作製し環境が構築できる人材がおらず、「体操しか知らない(パルクールについては)素人」が作った箱で、「後の方にパフォーマンスした人の時は箱が衝撃に耐えきれず、壊れていた」。

A 氏自身がジム内外でパルクールの環境を構築するときには月に 1 回レイアウトを組み替えることが珍しくないので、環境に「可変性」を持たせることをとても重要視しているとのことだった。それは、たとえ構築した時には、面白い、難しいと感じられるものを作ったとしても、A 氏自身が「考えずに

反応でクリアできてしまう」ようになった結果、2日で「飽きて」しまうことに起因しているようだった。

ジム内の用具を組み替える際には、1つの障害物で2、3個の動きができるように考えられており、安全面のためにそれらを全てジョイントなどでつないで設置されていた。そうすることで動きにくく、ズレにくいものになっている。A氏に「ジムで準備した環境は、どのようにストリートと異なるか、またストリートと似ているのか」という点を聞いたところ、「ここ（ジム）では天井が低く、できないことも多い。その中で、高低差を出したり、リズムが変わったりするように考えている。しかし、低い天井でもどのように「安全を担保して」行うかはトレイサーごとに異なっており、一概に言える物ではない。また、柔らかくしたり、高さを確保したりして安全を作るのではなく、「どうやったら「安全」に行けるかを考え、イメージすることで安全を作ることがパルクールである」とのことだった。

今までで一番良かったと思うレイアウトは、ワールドチェイスタグ（World Chase Tag）2018²⁹⁾のレイアウトと言っていた。そこで使われていた箱等も、繊維強化プラスチック³⁰⁾とボルトで作られており、非常に強固かつ動かしやすい物だった。

環境としてジムを整備することは、あくまで通過点や練習場所としてであり、本来、パルクールの楽しさや魅力とは、パルクールされることを想定していない街中にある構造物などを攻略することにある。A氏は、「たとえば、ベンチからコンクリート塀へと移る際に、濡れていたらそこでいかにリカバリするかを考え、安全にトレースできるかを考え、実行することがパルクールの実践である」と言っていた。ジム内に設置している用具は、ホームセンターで手に入る材料のみで作成可能であり、作製のノウハウはA氏よりジムの会員やその保護者へと伝えられている。会員やその保護者はその情報を元に用具を作製し、家でトレーニングを行う環境を作ったり、庭にジム内のようにパルクールする環境を構築したりしていた。そのことは、「家パル

(ウチパル)」や「庭パル(ニワパル)」と呼ばれており、講師陣や会員、その保護者での共通の言葉になっていた。



図1 A県のジム内にあるバー



図2 A県のジム内の様子

18:00 ごろより、ベーシッククラスの講習が始まる。小学生の男子5人。カリキュラム自体は昨日と同様のランディング(着地動作)の講習だった。受講生に持たせているファイルを確認させながら、標語「Be strong to be useful」を読ませ、そのために練習しているかなどといった声かけをする。そこから、ウォームアップに入る。首・肩・胸郭・肘・腰・股関節・アキレス腱など一通り伸ばさせた後、動的ストレッチもしくはプレ動作として、ジャンプ動作のトレーニングをさせる。

その後、ジム内を飛び越えながらその都度手をつくルールで走り、補強運動として、さらに、腕立て壁歩き(壁に足をつけ、手押し車の体勢をとって壁ぞいに歩行)をさせ、腕立て伏せもさせていた。

準備運動が一通り終わると、ランディングの説明を行っていた。そこでは、飛び降り方、その時考えられるリスクなどを説明しながら、実践を交えていた。とりあえずやってみようと言うことになるが、小学生と言うこともあり、とにかく高いところから飛びたがる様子。しばらくして、「ちゃんと伝えていなかったけど」と前置きし、プレシジョンジャンプで飛ばないといけないよと伝え、プレシジョンジャンプ(着地時につま先を揃え、膝を開く

着地動作)の復習を行っていた。すると、そもそもプレジジョンジャンプそのものが怪しい子が2、3名いた。そこで、平場でのプレジジョンジャンプの練習、階段一段分くらいの高さからのプレジジョンジャンプの練習など、低負荷で技術課題をクリアするような練習をさせていた。

30分ほどすると、単純なジャンプの練習に飽きてきたのか、方向転換からのランディング、コング(手をついてその間から膝を抜く動き)からのランディングなど、フロウを作るような子が出てきていた。その中で、自分の気持ちの良いコースのようなものを作っている子もいた。50分ほど経過したところで、到達度テストのように、順にランディングをしていく。それに講師がコメント、アドバイスを加える。フロウを作る中で、ランディングが疎かにならないようにとの総括をして終了となった。

19:30 ごろからアドバンスクラスの講習が始まる。「前も聞いたけど」との前置きで、将来の夢を聞いていた。そこから、どのようなスタイルのトレーナーになりたいかと言う話になり、フリースタイルなのか、スピードランなのかに区別されるが、自分のやりたいことに合わせて、オリジナルのヴォルト(手のつき方)や技を考えてやる、というのが本時の課題のようだ。それぞれ考えたものを講師を捕まえて見てもらうが、それは「〇〇の技だね」や、「××という技だね」など、先駆者がいて名前がつけられている様子だった。講師は其中で、フロウを意識させるように声かけをする。

20:30 が近づいてきて、それぞれに今日の技を披露して、クラスの練習が終わった。その後、使われていないジム内を歩き回りながら、壁面の張り紙や用具の写真を取らせてもらう。基本技術をする時の心がけや、動作の分類、カリキュラムが書いてある。これらは、コツが書いてあると言うよりも、気を付ける点や抱きやすい悩みが書いてあるように読み取れる。

A県のこのジムでは、バルクールの「本質」や「考え方」を非常に大事にしており、それが設計や配置にも反映されていた。具体的には、「組み替え可能である」という点が最大の特徴であると考えられる。その特徴は、バル

クールが屋外で行うものであるという原則を尊重し、それを想定して「トレーニング」を行うためにジム内のレイアウトを変更可能なものに行っていると言えるだろう。また、そこで使用される用具を作製するノウハウは会員やその保護者へと伝えられており、自宅に環境を構築している会員もいた。それは「家パル（ウチパル）」や「庭パル（ニワパル）」と呼ばれており、講師陣や会員、その保護者での共通の言葉になっていたことも興味深い。

2.2 Y県Z市のパルクールジム

ジムに入ると、リーダーにあたるD氏が出迎えてくれた。その時は、もう一人の指導者であるE氏と、高校生、大学生の男性が練習していた。このE氏は、社会人トレーサーだそうだ。しばらく眺めているうちに、女子2名と小学生の男児2名が増えた。それぞれ、母親が送迎にきていた。その利用者や講師のパフォーマンスを見ていると、A氏のパフォーマンスとはまた種類の異なるパフォーマンスのような感を覚えた。見てすぐの時は、アクロバット系や宙返りでフィニッシュするのが多いな、程度にしか思えなかった。だが、その違いに留まらないような気もして、その違いを読み解くヒントは、F氏に伺ったレギュレーションの話の中にあるように考えられる。

筆者が到着した時間はフリー練習の時間帯だった。その際には、E氏に壁の登り方を教えてもらった。壁に向かって走っていき、壁を蹴る。その反動で上に飛び、手を着く。それと同時にそれより少し早いくらいに、左右どちらかの脚を外旋させて引きつける。その反力により身体が浮き上がるので、引きつけた足で上がる。こうするとただの身体制御のような表現になってしまうが、こういった動作の連続体に「パルクール」という名前が付与されスポーツ競技として認められているのは、壁を乗り越えるという目標とそれを実現するためのアプローチの多様さ、そして達成感とその後の更なる動作の洗練化が一連のプロセスとしてトレーサーには共通理解があることが身をもって体感できた。

そのほかにも、斜めの台を駆け上がったたり、バーの上でバランスを取ったりと様々な動きを体験することができた。多様な動きを出すために、体操で求められる身体操作スキルが生かされるように感じた。それに関わって、体操経験者がパルクールを行うと、「強いトレーサー」になりやすいそうだ。体操競技の経験のないトレーサーは身体を作るためにパルクールを行っているのに対して、体操の競技経験を持つトレーサーはすでにある程度身体ができていて、それをパルクールに合わせる、ないしは寄せていくという作業を行うだけで適応することができる人が多いそうだ。

フリー練習時に筆者が体験したことは、「ジャム」の中で行われたことであり、筆者が受けた指導もジャムの中でのコミュニケーション（マゴマゴしていたので気を使われただけかもしれないが）と言っていいだろう。パーク内で行われていたジャムでは、鉄棒を使ってジャンプする練習を行っている高校生くらいの男子に人が集まっていた。そのほかには、小学生がひたすらバランスと斜めの箱を登ることを交互に繰り返していた。高校生くらいの女子2名が、練習を行っていた。そのうちの1名の女子は逆立ち歩きを繰り返すなど、高い身体能力を備えているように見えた。このトレーサーはあまり指導者たちと会話することも少なかった。後からD氏に聞くと、「依存しがちだったので、今日は自分で考えて行こう言った」とのことで、あの様子は「やりたいことが萎縮してできずに過ごしていた」様子だったそうである。

17:00 が近づいてくると、徐々に人が減り始め、高校生、大学生、講師2名と我々のみの時間ができた。そのタイミングで、D氏にパークを作るに至った経緯やそこでの苦勞を聞き取った。パークの設計では簡易のCAD³¹⁾を活用し、その図案を持って他のジムJを運営するメンバーにも相談に行ったことを話していた。このジムは難易度を高く作っているらしく、それが他の地域のジムと差別化をはかる点になっているようだった。D氏の話では、他のジムJもパルクールのスペースは全面展開されているわけではなく、むしろ少ないということだった。このジムは難易度を高くした結果、遠征に来たト

レイサーが満足してリピーターになってくれるといったことや、東京からこのジムへ1年間「修行」にくることを決めたトレイサーや、パルクールと仕事の都合がうまく合致した結果、Y県へ引っ越してこのジムを本拠地にパルクールを行うことを決めた人もいと語っていた。そういった人たちに対しては、D氏が所属するチームでサポートを行うことを考えていると言っていた。

このY県のジムはA県のジムと異なって、「移動可能」にはあまり重きを置かず、むしろ固定された大きな構造物の間に小物を様々に配置することで、つなぎやその間のジャンプなどに変化を作るという思想のようだった。パークを実際に作っていきにあたっては、移動可能なボックスなどの小物から作って、最後に固定される大きな壁や箱を作ったと言っていた。



図3 Y県のジムに置かれたボックス



図4 Y県のジム内の様子

この背後には、「ストリート」への展開をどう捉えているか、どう考えているかという思想との関連があるのではないだろうか。D氏自身も「ストリートは大事」という内容の話をするが、大事だからストリートでも展開できるようにといった主旨の話にもならない。「大事」という意味内容が異なっているのかもしれない。

安全管理の話では、熟練したトレイサーにパーク内にいてもらうことで人と人の衝突を回避させ、安全を作っているという話をしていった。環境の面

では、壁を厚く作ったり、箱を丈夫に作ったりすることが大変だったという話をしていた。それは翻って安全管理につながるのだろう。

それからすぐ後、F氏にY県におけるパルクールの歴史を聞くことを始めた。F氏は、パルクールの動画を携帯型小型ゲーム機に入れ、どこでも見て行えるようにしていたというエピソードや、練習会の人を集めるコミュニティとして2ch、モバゲー、グリーなどのネット掲示板やSNSなどを使っていたというエピソードを語ってくれた。SNSによって集められたメンバーが行う練習会は、いわばオフ会であり、YouTubeで動画を見て集まって練習する、集まったメンバーで動画を撮ってYouTubeにあげる、などという活動を行っていたようだった。そのオフ会は2ヶ月に1回のペースで行われていた。

話題は、競技化とレギュレーションへと移っていった。少なくとも日本で開催されている大会では、評価基準が明確に示されていて、それと対応した評価シートが用意されている。そのシートを「埋める」ように審査員にアピールした選手が勝つという構図らしい。レギュレーションに対して異議を唱えることは「「パルクール」じゃない」、だが、大会で勝つ人を「パルクールが上手い人」とは絶対表現しない。「強い人」と表現する。ただ、レギュレーションに沿うように行うパフォーマンスもその人のパルクールであり、レギュレーションに沿わずに行うのもその人のパルクールだそうだ。そもそも、納得いかなければ大会に参加しなければ良い、ということも言っていた。

21:00 ごろになり、ジムの閉店時間になると、片付けをして、出ることとなった。その後も、駅付近のスペースで食事をしながら話を聞くことができた。そこでは、F氏が以前YouTubeにアップした動画を見せてもらい、今は無くなったスポットだったり、その時集まったメンバーがどうやって連絡を取り合っていたかといった話を聞いた。

Y県のジムはA県のジムとは異なって、据え付けの障害物が多く、天井も高く、障害物も高いものが多かった。また、A県のA氏は「2日で飽きる」から可変的な用具にしていたのに対して、Y県のD氏は自身が難しいと感じ

る環境を構築した結果、「飽きない」環境を構築していた。利用者たちは動かさない環境であるが、様々に使い方を変え、オリジナルのフロウを作ろうと工夫していた様子が非常に印象的だった。競技化とレギュレーションの話では、パルクールのディシプリンを追求すると競技化とは相反し、「競技化されたパルクールはパルクールではない」というディシプリンにつながってしまうと考えられる。しかし、トレーニングを通じて「パルクールのディシプリン」を内面化させることで、自分がパルクールだと思っていないものも、パルクールとして受け入れるようになるのではないだろうか。F氏が語った内容からは、「概念としてのパルクール」と「パルクールの実態」は乖離している、ないしはジレンマを抱えていると言えるのではないだろうか。

3 パルクールにおける「環境の用具化」：競技化との関係

前章では、A県とY県の2つのジムの様子から、日本におけるパルクールの室内化の一側面を読み解こうとした。ここでは、「誰でも」「安全」にパルクールを実践することを目的として、準備されていた。

本章では、パルクールの実践環境に必要な障害物を用具化することで、パルクールの実践環境を室内外問わずに設られるようになることを「環境の用具化」として捉える。そのために、パルクールの競技化の特徴と、非競技的なパルクールの特徴の違いをスポーツ技術論の観点から紐解く。

ここで思い出したいのは第1章でも紹介した、キダーが述べた「トレーサーたちは、屋外でのリスクテイクを正当化するために屋内トレーニングを行う³²⁾」という側面である。「屋外での実践を前提としたパルクール」が染み付いているトレーサーには、屋内でのトレーニングは屋外で安全に実践を行うための「正当化」のツールとなる。つまり、「屋外で高度な実践をするにふさわしい十分な練習で熟達したトレーサー」となるために屋内でのトレーニングに励むのである。

しかし、「はじめに」で触れた「競技化されたパルクール」は都市空間での実践とは異なるものである。鉄棒や箱、坂などの障害物が準備され、競技者に技を発揮させ、フローを誘発する仕掛けになっている。そうすると、競技化されたパルクールでのパフォーマンスの高度化、成績の向上を目指すためのトレーニングをするためには、パルクールの競技会場に近い環境でのトレーニングが必要となる。つまり、都市空間から独立した競技会場を再現した環境でのトレーニングとして、ジムでのトレーニングが必要となるのである。

こうしたパルクールの環境の違いはスポーツ技術論の観点から説明することができる。金井淳二（1986）は、スポーツにおける身体以外の必要なものや自然環境、人工環境などを「スポーツ手段」と定義する。まず、一般的スポーツ手段は、スポーツに必要な自然環境ということができる。自然環境は必要条件としてのみならず、風、波などのように、ときには勝敗を決める要素として作用する性質も持ち合わせている。次に、直接的スポーツ手段は、2種類に分けられる。1つは、制御的スポーツ手段として分類され、さらに道具と非道具に分けられている。道具はラケット、バット、ボールなど身につける、もしくは手に持って使用する用具を指す。非道具は、コート、ネットなど、スポーツを行うための設備を指す。制御的スポーツ手段に対して、2つ目には、動力的スポーツ手段として、競馬や乗馬の馬や棒高跳のポールなどの身体を移動させる道具を分類している。最後に、間接的スポーツ手段として、照明、シャワー、ベンチなど、間接的にスポーツすることを支える設備が分類されている。

表2 スポーツ手段の分類³³⁾

ス ポ ー ツ 手 段	一般的 スポーツ手段	土地、河川、山岳、湖沼、海浜など		
	直接的 スポーツ手段	制御的 スポーツ手段	道具	ラケット、バット、ボールなど
			非道具	コート、ネット、グラウンドなど
	動力的 スポーツ手段	競馬・乗馬の馬、棒高跳びのポール、弓など		
間接的 スポーツ手段	照明、シャワー、ベンチなど			

屋外での実践を見据えたパルクールは、一般的スポーツ手段を主なフィールドとしてパフォーマンスを行う。それどころか、従来では一般的スポーツ手段として想定されない場所（＝スポーツする場所とは思えないような場所）でもパフォーマンスを発揮してしまう。つまり、屋外での実践を見据えたパルクールは、近代スポーツを想定して分類された枠組みを超えてしまうような文化となっている。

これに対して、競技化されたパルクールの方では、いわゆる「競技会場」が設られる。競技会場は、直接的スポーツ手段の制御的スポーツ手段にある非道具に該当する。競技として開催されるということは、競技者は全員同じ環境でパフォーマンスすることが前提であり、可変的に設計する必要がないのである。「フリースタイル」種目であれば、競技者は準備された環境で、他の出場者と違った技を繰り出し、異なるフロウを完成させようとする。しかし、それは競技者に委ねられており、都市空間を自由に動き回るといった第1章で整理したようなパルクールのスタイルとは異なるものとなる。さらに付け加えるのであれば、同じ環境で他者と異なる技を繰り出す、というのは従来の体操競技となんら変わりのないものになってしまっているのである。

ここで参考にした金井の分類は「近代スポーツ」を想定したものである。「近代スポーツ」とは、サッカーや陸上競技、野球などのポピュラーなスポー

ツの総称として使われるが、それらが持つ性質は以下のように整理される。

表3 近代スポーツ7つの指標³⁴⁾

① 世俗化	宗教的な儀礼からの解放
② 平等化	参加機会と競技条件が性別、人種、宗教、階級などに左右されない
③ 役割の専門化	多種目化、ポジション制、監督、コーチなどの分業
④ 合理化	ルールや設備の標準化、トレーニングの科学化
⑤ 官僚的組織化	地域 - 国家 - 世界と高度に組織化された競技の統括組織の形成
⑥ 数量化	時間、空間、記録の詳細な数値による定量化
⑦ 記録万能主義	詳細な数値により定量化された記録による競争

①世俗化、②平等化、③役割の専門化は競技化されたパルクールにも屋外での実践を見据えたパルクールにも当てはまる部分がある。競技化されたパルクールはこれに加えて、④合理化：競技ルールの制定、⑤官僚的組織化：国際体操連盟を頂点とする組織による管理、⑥数量化：パフォーマンスをタイム化したり点数化したりする、⑦記録万能主義：タイムや点数により他者との競争を生み出す、という点がある。つまり、競技化されたパルクールは近代スポーツ化された側面を持っていると言える。

こういった点から、キダーが主張する「トレーサーたちは、屋外でのリスクテイクを正当化するために屋内トレーニングを行う³⁵⁾」という側面のみで室内化を説明することには限界があると考えられる。競技化されたパルクールの練習のための室内化とは、競技環境を用具化して再現することで、競技大会に向けたトレーニングを積んでいることになろう。つまり、「環境の用具化」が起きているのである。

では、屋外での実践を見据えたパルクールではどうなっているのだろうか。もちろん、キダーの言うように「屋外でのリスクテイク」に対してトレーニングを積むための場として、屋内トレーニングを実践するという側面もある。だが、屋外でパフォーマンスを行うということは、パルクールそのものに馴染みのない人々からすると、「迷惑」や「危険」を抱いてしまう可

能性がある。そうしたリスクを回避するために、屋内での実践をメインとする選択肢が選ばれる。また、第2章のA県の事例で見たように、ジムの会員やその保護者が用具を作製し、「家パル（ウチパル）」や「庭パル（ニワパル）」と呼ばれる自宅での練習環境を構築することは、室内化を超えて「環境の用具化」が生じていることの典型的な事例であるといえよう。

このように、「環境の用具化」は、パルクールの実践環境に必要な障害物を用具化することで、パルクールの実践環境をどこでも作れるようにすることであった。この点は、競技化されたパルクールにおいては、均一的な競技環境を提供するという近代スポーツ化の側面があり、非競技的なパルクールでは私有地で合法的にパルクールを実践することで締め出されるリスクを回避するという側面を持っている。このように、競技志向のパルクールも、非競技志向のパルクールも包含する現象となっている。

おわりに

最後に、本稿がおこなってきた議論を振り返りたい。第1章では、ウィートンとキダーの議論から、パルクールのスタイルや屋外での実践を重視する考え方について整理した。そこでは、トレーサーは自身に降りかかるリスクと周囲に及ぼすリスクをコントロールする必要があるが、リスクをコントロールすることができるようになるために屋内環境でのトレーニングを選択することが述べられた。

第2章では、日本におけるパルクールの室内化の現状として、A県のジムとY県のジムでの観察調査を記述した。そこでは、運営者が自分の構築した環境に抱いている印象が全く異なっており、それがパルクールへのアプローチの違いが表れている点であった。また、A県のジムでは室内化のノウハウが会員に伝えられており、会員が自宅に環境を構築している点も興味深い点であった。

第3章では、「環境の用具化」としてまとめるために、スポーツ技術論の議論を援用し、競技化されたパルクールの特徴と非競技的なパルクールの特徴を比較した。そこから、「環境の用具化」は、競技化と相まって近代スポーツ化を推進するという側面と非競技的な実践を行うために街中のスポットから締め出されるリスクを負わずにパルクールを実践するという側面の双方に生じている現象であることが明らかとなった。

「環境の用具化」は、アーバンスポーツの潮流と相まって今後加速していくことが想定される。たとえば、Baseball 5 というベースボール型アーバンスポーツの事例がある。このBaseball 5 は、5人制で行うバットを使わない野球であり、従来の野球に比べて、大幅に少ない敷地面積での実施が可能となる。また、専用の会場を必要とせず、ベースとエリアを示すマットを敷くと、すぐにゲームを始めることができる。実施環境をマットやベースといった用具で構成する、まさしく、「環境の用具化」が起きているのである。

この「環境の用具化」は環境問題への対応や公園行政とも相性が良い。用具を設置するだけで競技が行えるということは、競技会場を作るために開発を必要としない。また、それに伴った公園の整備も不要となる。加えて、既存の公園の多目的スペースや駐車場でも競技会場が設られるのである。

今後、環境の用具化は様々なスポーツで移設、組み替え可能な環境が用意され、ますます広がっていくことが見通せる。それと同時に、我々はどうのような「スタイル」を見失う可能性があるのか、つぶさに観察する必要があるだろう。

謝辞

本研究は、立命館大学人文科学研究所助成プログラム（2019年度若手研究者研究支援：研究課題名「日本におけるパルクールの早期実践者の取り組みとスポーツ思想についてのフィールド調査（ライフスタイルスポーツ研究会：研究者代表 加藤雅俊）」および2020年度人文科学研究所助成プログラ

ム：研究課題名「スケートボードとパルクールを対象にしたアーバンスポーツと都市の景観開発、都市政策、観光政策をめぐる社会学的研究（アーバンスポーツ研究会：研究者代表 市井吉興）」の助成を受けたものである。

注

- 1) パルクールの歴史的、文化的背景については、Jeffrey L. Kidder『*Parkour and the City: Risk, Masculinity, and Meaning in a Postmodern Sport*』および、本特集に所収されている平石貴士「パルクールの歴史と先行研究および宮城県富谷市における実践例」が詳しい。
- 2) ファミ通 .com、『日本を代表するパルクールアスリート・ZENが映画『アサシン クリード』のアクションを語る！』、<https://www.famitsu.com/news/201703/02127736.html>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 3) 日本パルクール協会、『パルクールとは』<https://parkour.jp/about-parkour/>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 4) 日本パルクール協会、『パルクールとは』<https://parkour.jp/about-parkour/>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 5) 日本パルクール協会、『パルクールとは』<https://parkour.jp/about-parkour/>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 6) 日本パルクール協会、『パルクールとは』<https://parkour.jp/about-parkour/>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 7) 日本パルクール協会、『パルクールとは』<https://parkour.jp/about-parkour/>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 8) 日本パルクール協会、『パルクールとは』<https://parkour.jp/about-parkour/>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 9) 日本パルクール協会、『パルクールとは』<https://parkour.jp/about-parkour/>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 10) 市井吉興、2019
- 11) 三谷舜、2021
- 12) JUMP LEAP、『MASTER OF UR "FLOW"』<https://www.jump-leap.com/flow>（最終閲覧日 2021/08/31）
- 13) 同上
- 14) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.111
- 15) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.111
- 16) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.122
- 17) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.123

- 18) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.123
- 19) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.124
- 20) Kidder, 2017, Chapter 4, 電子書籍版のためページ数不明
- 21) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.125
- 22) Kidder, 2017, Chapter 4, 電子書籍版のためページ数不明
- 23) Kidder, 2017, Chapter 4, 電子書籍版のためページ数不明
- 24) ベリンダ・ウィートン、2013=2017、p.125
- 25) Kidder, 2017, Chapter 4, 電子書籍版のためページ数不明
- 26) Kidder, 2017, Chapter 4, 電子書籍版のためページ数不明
- 27) アナログンとは「まだやったことのない運動を表象したり、投企したりするために、運動経過を臨場感をもって思い浮かべる素材として用いられる類似の運動例」のことを指す。(三木四郎、「アナログン」、『学校体育授業事典』大修館書店、1955、p.3)
- 28) この大会は、兵庫県淡路島国営明石海峡公園にて開かれた「UNDOKAI WORLD CUP 2019」におけるプログラムの1つとして、日本体操協会主催、日本アーバンスポーツ支援協議会後援で開かれた。(https://www.jpn-gym.or.jp/parkour/28806/ 最終閲覧日 2021年8月25日)
- 29) この大会は、イギリスのロンドンにあるヨークホール (York Hall) で開催された鬼ごっこ (Chase Tag) の世界大会である。日本では「パルクール鬼ごっこ」とも呼ばれ、室内に設置された障害物を避けたり利用したりしながら競技を行うものである。(https://www.worldchasetag.com/post/wct3 最終閲覧日 2021/08/31)
- 30) エポキシ樹脂やフェノール樹脂といった強度の低いプラスチック素材にガラス繊維や炭素繊維などを混ぜ込み、強度を上げた材料のこと。FRP と略されることが多い。スポーツ用品ではテニスラケットやソフトボール用のバット、自転車用のヘルメットなど多岐にわたって採用されている。
- 31) CAD とは「Computer Aided Design」の略で、コンピューターによる設計支援ツールのこと。
- 32) Kidder, 2017, Chapter 4, 電子書籍版のためページ数不明
- 33) 金井淳二、1986、p.98 を基に筆者作成
- 34) アレン・グットマン、1978=1981、pp.31-95、リー・トンプソン、2010、pp.209-218 より筆者作成
- 35) Kidder, 2017, Chapter 4, 電子書籍版のためページ数不明

参考文献

- 市井吉興、「『創造的復興』と延期された2020東京オリンピック—例外状態・ニュー・ノーマル・ライフスタイルスポーツ」、『大原社会問題研究所雑誌』、742、法政大学大原社会問題研究所、2020a、pp.67-83

- 市井吉興、「[「ニュースポーツ」]とスポーツツーリズム—スポーツツーリズムの資源としての「ニュースポーツ」の可能性とは?」、『観光学評論』、8 (1)、観光学術学会、2020b、pp.71-83
- 市井吉興、「[「アーバンスポーツ」]と二〇二〇東京オリンピック—国際オリンピック委員会が期待する「スポーツの都市化」とは何か?」、『唯物論研究年誌』、24、唯物論研究協会、2019、pp.170-182
- Wheaton, Belinda、『*The Cultural Politics of Lifestyle Sports*』、Routledge、London、2013 (＝ベリンダ・ウィートン著、市井吉興、松島剛史、杉浦愛監訳、『サーフィン・スケートボード・パルクール ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版、2019)
- 金井淳二、「第1章 スポーツの起源とスポーツ技術」草深直臣、芝田徳造、水田勝博編『新版 現代・スポーツ・健康』文理閣、1986、pp.85-96
- 、「第2章 スポーツ技術の概念」草深直臣、芝田徳造、水田勝博編『新版 現代・スポーツ・健康』文理閣、1986、pp.97-109
- Guttman, Allen、『*From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*』、Columbia University Press、New York、1978 (＝清水哲男訳、『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ、1981)
- Jeffrey L. Kidder、『*Parkour and the City: Risk, Masculinity, and Meaning in a Postmodern Sport*』、Rutgers University Press、2017
- 豊島誠也、田里千代、「都市空間で波に乗る—アーバンスポーツとしてのサーフィンの可能性と課題」、『体育の科学』、69 (8)、日本体育学会、2019、pp.591-595
- 三谷舜、「[「スポーツの都市化」]が近代スポーツに与えるインパクトとは?:アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」の文化社会的考察」、『立命館大学人文科学研究所紀要』、126、立命館大学人文科学研究所、2020、pp.147-170
- リー・トンプソン、「儀式から記録へ A. グットマン『スポーツと現代アメリカ』」、井上俊ほか編『社会学ベーシック 8 身体・セクシュアリティ・スポーツ』世界思想社、2010、pp.209-218